

光厳天皇遺芳

今年（昭和三十九年）八月十三日（旧暦七月六日）は光厳天皇の満六百年の式年祭に当るので、天皇が開山となって創始し、ここに隠棲し、やがてこの地で亡くなった京都山国の常照皇寺ではその記念として、天皇の宸翰・御記・和歌などの確実なものを厳選して写真版にし、詳細な解説を付して出版した。即ち、本書『光厳天皇遺芳』である。宸翰は京都大学の赤松俊秀博士が、御記は京都大学の上横手雅敬氏が、和歌は大阪市立大学の園枝利久氏がそれぞれ分担解説している。

まず宸翰では、松平頼明氏所蔵の摩訶般若波羅密多心経、宮内庁書陵部所蔵の処分状、熊谷直清氏所蔵の置文など一四点の口絵写真と、その読み本を掲げ、この解説を兼ねて「光厳天皇の御生涯」と題する三〇頁を越す論文が続く。さきに中村直勝博士の『光厳天皇』（本誌四五ノ一に筆者が紹介した。淡交新社昭和三十六年）があり、今また

本書が公刊されて天皇の事蹟がいよいよ明らかにされてきたことは、たいへん喜ばしい。中村・赤松両博士とも京都の古文書学を代表する権威であり、その両博士が期せずして同じ光厳天皇の伝記を書かれたことになるが、両方ともに特徴ある内容で、後学には大いに面白く味読できる。赤松博士の解説は極めて綿密慎重であって、そのため断定を留保しているものが二・三ある。

たとえば宮内庁侍從職所蔵（京都曼殊院旧蔵）の仮名消息の筆者の考証に際して、筆致は広義門院寧子（光厳天皇生母）に通ずるものがあるとしながら、広義門院の花押が現在のところまだ確認されていないため、消息の内容から発信人が光厳天皇じしんではありえないことを承知しつつ、なおその花押が青蓮院所蔵の光厳天皇宸翰消息の花押に近いことを願慮して断定を留保しているなどは、その好例と言えるであろう。一方的に断定してゆくという論調でないから、快刀乱麻を断つ痛快さは感ぜられないが、いちいちその理由を掲げて説明してあるので、納得し易いわけである。殊に目新しいのは、従来その内容を彈って紹介されなかった熊谷直清氏所蔵の置文が写真入りで全文紹介

され、その新しい解釈を提示されていることである。われわれは宸翰を網羅したものととして『宸翰英華』を座右に備えるが、皇紀二千六百年記念のこの書にはいわゆる北朝五代の天皇は除かれていて、その点では非常に不便であった。今回の『光厳天皇遺芳』は『宸翰英華』の光厳天皇の項を作成したもの、とも言いうるのであって、われわれには随分と便利になった面が多い。そういう点から言えば、伏見天皇、後伏見天皇あたりから始まる持明院統の美しい優雅な筆蹟（かの青蓮院宮尊円法親王もそのひとりである）は光厳天皇にも正しく継承されており、やがて後小松天皇へ連つてゆく筋道がよくわかるような気がする。天皇の著述、御記としては、元弘二年正月御記、元弘二年御即位記、玄象牧馬事、および西三条家装束抄より逸文を収めており、上横手氏が「光厳天皇御記について」と題する解説を執筆している。宸記については『列聖全集』が『宸翰英華』と同じ役目を果しており、ここでも列聖に数えられていない光厳天皇の宸記は除かれていたわけであるが、これも今回のこの書で、こと光厳天皇に関する限りは解決された。光厳天皇の著述は有職

関係ばかりであって、後醍醐天皇にも「建武年中行事」の書があることを想起すれば、この時代の古きものに対する関心の高さに注目すべきものがあることを思わねばならぬが、正直言つて史料としての興味には欠けている。こんなことを書く著者には申訳けないが、これが機縁となつて、万一、北朝歴代の宸翰・宸記が続いて公刊されることにでもなれば、史料として面白くて、宸筆本の伝えられている「光明院御記」などが公刊されることとなるから、それこそ望外の喜びになるのだが、この夢は厚かましすぎるであろうか。

和歌は光厳院御集と風雅集、新千載集などの勅撰集、および隆永和歌集などの私家集や歌合などから天皇の詠歌二八七首を集め、頭註と解説が付けられている。和歌のようなみやびの道には門外漢の筆者では評言も憚るが、『列聖全集』の和歌の部の光厳天皇の項を補つたという意味では、さきの宸記と同じく斯界に裨益するところ大なるものであろう。国枝氏の解説も懇切であるが、筆者などが通読して奇異に感ずるのは、万葉の咀嚼が地についたというようなことでなく、あれほどの動乱期にまさしく

劇的な生涯をすごされた天皇の詠歌があまりにも没世間的な自然観照や恋歌ばかりであることについてである。その点、「新葉和歌集」の後醍醐天皇・後村上天皇はじめ南朝君臣の和歌は、逆境を生きる人間の苦悩や感慨がにじみ出ていて、読む者の共感をよびおこすのとは、全く対照的である。

それが、伝統的な持明院統の歌風だ、と言われればそれまでだが、さらに深く考うべき緒口になりそうに思える。

最後に、是非付言しておきたいのは、本書の編集に当られた京都大学の阪倉篤義教授をはじめ、和歌の項の監修に当られた大阪市の谷山茂教授など、直接執筆されなかつたひとびとの協力が、この書の価値をますますゆかしいものにして、感ぜられる。そういう意味でも気持のよい書物である。

(B5判本文一七九頁　ロタイプ二六葉
昭和三十九年八月　京都府北桑田郡京北町井戸常照皇寺刊　非売品)

(石田善人)

広島大学寄託

加計隅屋文庫目録 第一巻

広島県山県郡加計町の加計家は、隅屋と称し、近世初頭、銀鉞の開発によって巨富を擁したが、その後寛永末年頃から鉄山業に転じ、これを中心としながら酒造・川舟・農業等を併せ経営した。慶安四年から村庄屋として、また藩の地方役として地方政治に干与した。

隅屋鉄山業の最盛期であった化政期には、鑪二か所・鍛冶屋十一軒・酒造所四か所のほか、広島と大坂に本店をもち、大坂通船二艘・川舟十八艘・土蔵三十六か所・借屋四八九竈・家賃二一一人・牛四八匹・馬四八七匹を有したという。

故藤田五郎氏によって、後進地帯における農奴主マニユファクチュアと規定された『封建社会の展開過程』加計家の経営については、かつて本欄でも紹介した『加計町史』(本誌四五巻六号参照)にさらに詳しいが、その数方点に及ぶ膨大な史料が、「加計隅屋文庫」として広島大学に寄託され、目録が同大学国史研究室の教官及び大